

## 孤立傾向をもつ児童の教育相談

長 田 英\*

相異なったタイプの孤立傾向をもったふたりの児童について、より好ましい社会性を育てるための働きかけを試み、その変容を期待した。この事例をとおして、学級担任がカウンセラーとしての資質を磨くことに努力を要するのはもちろんであるが、家族の協力もいかにたいせつか示唆されたといえよう。児童の変容を期待するには、まず、親を含めたカウンセリング関係の成立が重要視されなければならない。

### はじめに

H子は、近くで級友がどんなに楽しそうに遊んでいても、自分から進んでなにか入りすることができず、すみで指をくわえていることの多い子であった。A子は、だれとでも遊びたいのだが、なぜか、いつも疎外され、孤立してしまうタイプであった。相異なるタイプであっても、こうした孤立の状態が続くかぎり、ふたりにとっての学校生活は決して楽しいことのあるはずがない。「ひとりひとりをたいせつに、きめこまかな指導」を考える時、この子たちにさしのべるべき援助の手だては何であろうか。教育相談の精神を生かす努力を重ねながら、少しでも、より望ましい社会性が育ち、交友関係も円滑化し、はりのある学校生活がおくれるよう願って試行錯誤しながら実践した。

## I 研究の方法

### 1 目的

相異なったタイプの孤立傾向をもったふたりの児童について、交友関係の円滑化、学校生活への適応をはかるなど、望ましい社会性を育てるため教育相談を行なう。

### 2 対象

H子 昭40年1月29日生(小2女児) A子 昭39年12月10日生(小2女児)

### 3 調査・検査等

(1) 1年次よりの観察の状況 (2) P-Fスタディによるパーソナリティの理解 (3) 知能テスト

\* 豊栄市立早通小学校

## (4) 家庭学校間の連絡を密にするための連絡帳 (5) ソシオメトリック・マトリックス

## 4 面接によるカウンセリングの実践

## (1) 母親との面接 (2) 児童との面接

## 5 学級集団の中でのプレイセラピー

・体育時の利用 ・鬼遊び ・砂遊び ・マラソン

## 6 係り活動, その他における励まし

## II 対象児童の概況

## 1 H子について

## (1) 家庭の状況

ア 家族 父 40才 会社員 大学卒  
母 29才 家庭 高校卒  
妹 5才 保育園

## イ 家族の人間関係

本人が3才の時に妹誕生。育児の責任は母親であったが、妹の誕生により、本人に対し、拒否の態度が無意識的に多くなったようである。両親ともきょうめんで神経が細かい。

## ウ 家庭での友人関係

ほとんど、妹のみが遊びの相手である。妹とよく衝突し、母親の叱責を受けることが多い。自分の方から友人訪問はしない。

## (2) 学校における行動

## ア 入学の頃

・もちものの出し入れ, 整理整頓がうまくできない。靴を左右反対にはいても無とんちゃく。

・教室にすることが多く, 担任に手をひかれて外へ出ても, なかなか, 心からとけ込めない。

・粗暴な男児にさわられ, 突かれなどしても無抵抗, 無表情でいる。

・運動用具に異常なほど恐怖心をもつ。

## 2 A子について

## (1) 家庭の状況

ア 家族(現在) 祖母 74才 尼僧  
養母 36才 尼僧

## イ 家族の人間関係

46年12月より入居し, 現在に至る。36才の尼僧も養女である。A子は寺の後継者としての期待をかけられ, 養女となる。両尼とも, A子と生活を共にし, 次第に性格や素行を知るにつれ, 養育に対し非常な不安感を抱きはじめる。一方, A子は, これまで養女や里子として転々とし, ようやく安住の地を得たような喜びをもち, 寺の子の誇りを感じている。

## ウ 家庭での友人関係

いったん, 家の外へ出ると帰ることを知らないほどよく遊ぶ。一定のところでは, じっくり遊ぶのではなく, 転々と場所やなまをかえる。

## (2) 学校における行動

## ア 転入当時

・人なつこく, 特に上級男児に対して関心深くしゃべっていることが多い。

・ものの始末, 整理整頓がきちんとできない。

- 給食少食、好ききらい多くよくこぼす。
- 動作にぶく団体行動がうまくとれない。

#### イ 46年7月の事件

学校帰途、同級で近所の男児3名になぐるけるの乱暴をうけ、いじめられるという事件発生。原因はH子が男児IのけしゴムをとったということらしいがH子は否定。H子の両親はこの事件を重くみ、激怒し、3児の各家をまわり陳謝を要請。この時のH子の母親の態度がその後の近所づきあいにしこりを残す結果をつくってしまう。一方、H子は、翌日より登校拒否反応を示したが、学校との連絡により回避できたものの、当分母親監視の登下校が続いた。

#### ウ 自我について

◦毎月、学校から購読している雑誌がH子にだけ係りの手違いから渡されない月があった。代金を請求した時母親からの連絡でこのことがわかったのだが、H子は全くの無反応である。待ちに待っている雑誌なら黙っておれず、せめて母親にだけでも、その不満を訴えないでおれないというのが低学年の特徴であろうに……。

◦また、入学してはじめての秋季大運動会の時も応援席にいたまま、うつろな眼でどこかを見ているようすで敵味方の勝敗には全く関心を示さない態度が注目された。

粗末にしたり、やたらに人に与えたがる一方、欲しいものがあるとがまんできなく、とったりすることもあった。

◦給食は好ききらいなく食欲旺盛。

◦落ちつきなく注意散漫で、学習意欲に欠ける特に思考を要する教科を嫌う。

◦運動能力優れ、積極的行動的であるが、場所をかまわず、走り回ったり、ふざけたり、一日に数回、泣いたり、わめいたりする。

#### イ 足洗い場事件

◦授業時間中、席を立ち、便所へいくといって足洗い場のところで便をしたまま、ぬぐわないでそのまま授業を続けていたことがあった。強力な黙否権の行使でなかなかすなおに白状しなかったが。このこと以外にもよく下着を汚しており、友人から「くさい」といわれる。遺尿、夜尿のくせ、不潔に対する感覚の鈍さなどが感じられ、養家を転々したことも、こうしたことが一つの原因となっているようである。

#### ウ 放浪癖と虚言

「家に鍵がかかっているはいれない。」と平気でうそをいって、ランドセルをかついだまま、友人宅を遊び歩いたり、それがばれると、林の中へランドセルをかくして暗くなっても家へ帰らないということが、しばしばあった。

### Ⅲ 実践と経過

#### 1 諸検査からの考察

##### (1) WISC知能検査 (H子)

言語性 IQ	112	} 全検査 IQ 90
動作性 IQ	69	

言語性と動作性にひどいアンバランスがみられ特に社会性、運動感覚に問題が感じられる。

##### (2) Y-G性格検査 不安定消極型(E型)

##### (A子)

言語性 IQ	117	} 全検査 IQ 112
動作性 IQ	102	

依存の態度、よく考えず失敗しがち、一般的理解など問題もあるが、集中力もあり、すぐれる。

##### (2) Y-G性格検査 不安定消極型(AE型)

内向性強く、社会的不適応の傾向が著しい。特に非協調性の因子が強くあらわれている。

### (3) P-Fスタディ

GCR(集団順応度)54%でふつうと考えられるが、超自我因子欄はいずれも低く、社会性、精神発達のおくれを示しているといえる。また、自責、自己非難の反応大、社会適応困難の原因がここにあると考えられる。

非活動性、思考的活動小、および非協調的因子が強くあらわれている。

### (3) P-Fスタディ

GCRは46%で就学以前の程度。超自我因子もいずれも低い、(I-I)%のみ21%と著しく高い。自責、自己非難、自分の気持ちの抑圧傾向をもつ。

## 2 指導の方針

- (1) 家庭でも学校でも、父母や教師が本人のすべての面を理解してやり、受容的態度をもって接することが、まず、重要と考えられる。そのためには、父母と担任教師との信頼感ある人間関係の確立を図ることにつとめる。
- (2) (1)を基調とし、学校内、学年内、教科などにおけるチームテーチングの特性を生かし、広く、本人の自己実現を図れる場を作るような協力体制を検討し行なう。
- (3) 学級の全体的配慮の中から特に、HやAに対する接触の機会を多くもつよう働きかけを試みる。賞賛を与える場合には学級全体の前で行ない、児童間においても互いに認め合い尊重し合うふんいきづくりを考える。また、学校生活すべてにわたり、叱責、訓戒よりも、容認、激励などにより、よりよく自分の問題解決にとり組もうとする意欲を高め、自信づけを図りたい。

## 3 実践

### (1) 学級集団の中でのプレイセラピー

#### ア 鬼遊びでスキンシップを

身体を活発に動かすことによって、児童自身の心の解放を図ること、児童間、および担任と児童とが手をつないだりしてスキンシップを図ることを主たるねらいとする。体育時または休憩時を利用、10～15分間、入学当初より継続的に行なっている。

担任が一番鬼になり、H子のように足のおそいのは、できるだけ終わり頃まで逃げさせる。H子は不注意から人や柱によく当たる。けれどもこの時間の表情は生き生きして楽しそうである。

A子は足が早いので、たいてい鬼を希望する。しかし、鬼になると、ひとりを執ように追うのではなく、あっちこっち散まん追いまわしてなかなか、子をふやすことができない。みんなから文句が出ると、大声で泣いたり、かみついたりする。

#### イ 砂遊びで解放、協力、創造を

校庭の片隅の砂場へ学級全員を連れていき、拘束なしに気ままに遊ばせ、やはり、自己解放、協力による社会性の陶冶、創造力の伸長などをねらいとする。

H子は、はじめ、つまらなそうにひとりで砂を

A子は、自分ひとりで没頭してやることも、人

いじってみたり、他人のやるのをぼんやりみていることが多かった。回数を重ねるにつれ、他の女児の誘いに合流して遊べるようになってきた。(2年5月頃より)しかし、共同でものを作るといふより、なかよく並んでめいめい勝手にやる域からまだ脱しきれない。人にじゃまされると中止してしまう。

#### ウ マラソン (担任外教師との連けい)

2年生より2学級編成となる。H子、A子とも、引き続き私が担任するが、体育のみ交換で隣学級の明朗頑健の青年教師T氏に受けもってもらうことにした。T氏は、体力気力の充実を図って、マラソン指導に重点をおいた。ふたりとも、根気と忍耐のいるマラソンを非常に苦手とし、記録はなかなか上がらないが、T氏の人間的魅力に影響され、体育時を楽しみにしているようである。

特に、A子は家庭でも学校の担任も女性のためか、T教師に甘えたがり、T教師もA子をよく理解し遊んでくれたりして、A子にとって、T教師の存在の意義はまことに大きいものがあるといえよう。

## (2) 家庭との連けい

### ア 母親との面接

H子の母親は、家庭で編みものの内職をしているが、学校の用にはできるだけ出席するという教育熱心である。H子については大へん心配し、自身の養育態度についても反省的で前向きの姿勢がうかがわれる。母親との面接は定期的ではないが入学当時より折あるごとに行なってきた。比較的率直に日頃感じたことをありのまま話してくれるし、それに対し、私の方でもできるだけ純粋な気持ちで聞くという態度で努力してきている。

そのためか、母親との関係にある程度の深まりができてきたと考えられる。これまでの面接は、いずれも呼び出し相談的に行なわれ、母親自身が求めた面接は一回もない。

### イ 連絡帳

家庭や学校におけるH子のようすについて、互いに連絡しあうためのノートで、H子をより深く理解する面で役立ち、現在も継続的に使用している。担任としては、できるだけ、H子の長所、ほめるに価いすること、認めてやりたいことを主と

と協力することもなかなかできない。一つところにしばらく遊ぶことができずに、次々と場所やなかまをかえていく。が(我)をとおそうとして衝突も多い。よく担任に不満を訴えにきたり、大げさに泣いたりするがすぐ、けろりとして同じことを繰り返している。

A子にとって、ふたりの尼僧は母親祖母代理となるわけであるが、どちらも積極的に来談される。特に養子縁組当初より4、5か月間、自発的に相談を求める回数が多かった。その後、落ちつくにつれ、次第に回数も減り現在(47年9月)月1回でいどである。

47年1月(はじめの頃)

C……くわしいことを聞かないでA子を養女にもらってみたのですが、どうしたもんかとふたりで(老尼と)首をかしげています。(夜尿・遺尿・不潔・放浪癖・虚言等の困らせられている悩みを訴えるばかり。)

T……ともかく、生まれた時から愛情に恵まれず適切な保護もなされないできたのですから、赤ちゃんからやりなおしのつもりで、私たちは努力しましょう。

47年8月

C……しばらく落ちついていたと思ったのに、夏休み第一日目に放浪癖がまた出てしまって……。

して連絡するよう心がけている。両親ともこのノートに関心が高く、連絡によく協力してくれている。

#### ウ 父親について

H子の情緒不安、非社会性等の問題になる点については理屈としては承知している。家庭では、父親なりの考え方で、そのための対策を考えているようすが連絡帳からもうかがわれる。しかし、H子を客観的に理解するための診断的諸検査には「差別の材料にする」と拒否的で、親子関係テストの協力も得られなかった。

### (3) 最近のようす

7月末のソシオメトリック・テストをみても、クラス内の地位指数についての変動は、あまりみられないが、個人の内面の変容が次の現象からうかがわれる。

H子は、本年6月に転入してきた男児Kに対してのみ、積極的能動的態度で、からかう、追っかける、じゃまするなどの関係をもとうとしているようすがみえ、変容のきっかけが感じられるようになった。また、夏休み中の絵日記には、これまでにない人物のいきいきした動きや表情が描かれしかも、意欲的に一冊を完了させている。

2学期にはいって、毎休憩時、鉄棒にぶらさがって遊ぶようになった。これまでできなかったものが、しだいにできるようになり、担任にその喜びを話して聞かせ、また、実際にやるところを認めてもらうことによりますます自信をつけ、表情も明るくなってきている。

#### おわりに

孤立の態様、性格、家庭環境とも、まったく異なると考えられるふたりの児童を例の比較考察を試みてきた。この研究をとおしてどちらにもいえることは、好ましい条件のもとでは建設的方向へ自ら変容していく力をもっていること、この力を親や教師やなかまが、どう支え、援助してやるかが、今後を伸ばす大きな課題となるといえよう。子どもの問題の要因が特に親子関係にあると考えられる場合、担任でもあるカウンセラーが、親との間に真のカウンセリング関係をもたせることの難かしさを痛感した。

(ラジオ体操に出たまま、午後2時を過ぎても帰らず、大さわぎになる。結局、友だちの家を転々としていたことがわかった。)

C……音楽が好きなので、ピアノを習わせようかとも思うが、放浪癖が心配で迷っています。

T……A子さんを信じてやれないのですね。

C……はい。とても……。

(ピアノ教室へは9月より通いはじめる。A子はそのことが、またひとつのはりあいとなる。)

A子は、寺の境内に咲く四季折々の花を教室に生けたり、他教室へも配って歩いたりして大へん満足げである。花係りとして、花の名前を知らせる役目も確実にやれるようになってきている。壇家への経上げ、茶道のけいこ、ピアノ教室などと多様な人との接触も積極的に行ない、寺の子としての落ちつきと自信が、徐々にできつつある。運動会では、徒走に一等をとるなど、大活躍をし、このことがまた、その後の学習意欲にも転移されてきていると考えられる。放課後残って担任の手伝いをしたり、課外運動したりに満足し、これまでのように、ランドセルをかついだままの放浪もまったくみられなくなってきている。